

---

# Lostpowers2

東 孝太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Lostpower 2

### 【Nコード】

N8572X

### 【作者名】

東 孝太

### 【あらすじ】

「情」を多く持つ悪魔の主人公。ウェルギウスⅡルシファーは一人の少女と出会い、少女と旅をした。そして、世界を守り命を落とした。

主人公の居なくなつた平和な世界。その世界では悪魔たちによる「終末」が始まりつつあつた。

## 第1 stage 始まり

アルスの死から一年の時が過ぎた。

世界は零とSが誕生する前のいたって平和な世界に戻りつつあった。そもそも平和とはどのようなものなのかははっきりしていないが、零とSが存在していた時のように毎日が恐怖に包まれていることはなくなった。言うならば以前よりは平和になったと言うべきであろう。

そんな平和な世界で高校に通い、2年生となった姫坂雪音はとある学校の2-Aという教室の中で窓側の前から3番目にある自分の椅子に腰をかけ、机に肘をつきながら意味もなく窓の外を眺めていた。桜の花びらが空を舞っている。

「ゆーきねっ！」 姫坂は突然後ろから何者かに声をかけられた。

「その声は水玉か。なんだ？」 姫坂はそう言いながら視線を窓から自分の後ろに立つ人物に変えた。

女子高校生で2年にして身長170cmという高い身長を持つ黒髪ショートヘアの野球部のマネージャーの少女。数多い姫坂の友人の中では3番目に入るほどの仲だった。名前は水玉萌<sup>みずたまもえ</sup>である。

「なにぼんやりしてんの？もしかして好きな人が出来たとかあゝ」  
水玉はからかうように言った。姫坂は表情一つ変えず、冷やかに否定した。水玉は肩を落とす。

「じゃあなんでそんな上の空なの？」 霧島はため息をついて行った。雪音は別に、とつまらなそうに言い、自分の机から教材を出した。

「それよりもあき。宿題やったのかね？ 前回も前々回も宿題を忘れただろう。今回忘れたら呼び出しをくらうかもしれないぞ」 姫坂はこれ以上発展しないと思い、話題を変えた。姫坂にいきなり話題を変えられた水玉はいやな顔一つせずむしろ自慢げな顔になり、腰に手を当てて笑った。

「ふっふっふ」。ちゃ〜んとやってきたのだよ！ ほらね！」 霧雨

はそういつと雪音の右斜め前の自分の席から一冊のノートを取り出し、雪音の前でパラパラとめくって見せた。

「それは国語古文のノートだろ。今回の宿題は数学？だぞ」姫坂が冷たい声で言った。霧雨の手からノートがパサリと落ちる。

「馬鹿だなあ君は。ノートを貸してやる。写すか何かしてやり過ぎすんだな」雪音が霧雨の手にノートを押しつけると、姫坂は力なく受け取り、ふらふらと自分の席に向かった。

ふう、と姫坂はため息をついた。そしてまた視線を窓の外に変えた。桜の花弁と共に蝶が優雅に飛んでいる。

(やはり足りない) 姫坂は心の中で呟いた。

(アルスは今頃天国・・・いや悪魔だから地獄か)

(地獄で何やっているのだろうなあ・・・) 姫坂の黒い髪に窓の外から吹いてくる風が当たり、なびく。床に落ちている姫坂のノートも風に吹かれ、ペラペラと音を立てながらめくれる。

世界には春が訪れようとしていた。

## 第2 stage 春風とともに

授業を終えた雪音は霧雨にノートを見せてくれた礼にと映画のチケットを手渡された。最新作の映画だったことと、特に断る理由もなかった。なので姫坂は受け取った。

水玉は姫坂に集合時間を告げると時計を見て時間だ、と呟いて、姫坂に別れを告げて駆け足で去って行った。雪音も他の友達に別れを告げ生徒会室へと向かった。

姫坂は零とSの脅威から世界を救った英雄という事になっているので、その正義感を買われて生徒会に入ったのだ。役柄は副会長である。生徒会長は面倒なので断った。

姫坂は生徒会室に到着し、扉を開くとその扉の向こうで広がっていた異様な風景に目を疑った。

誰もいないのだ。

会長どころか書記も会計もだれ一人いない。鞆自体は置いてあるが誰もいないのだ。もし生徒会室以外での活動ならば、机の上に連絡を伝える紙が置いてるが、それもなし。

「どこ行っただ？」 姫坂は呟く。外を通ったバスの走行音が部屋に響く。

姫坂は鞆を自らの机に置くと椅子に座った。孤独という名の沈黙が続く。

(眠い・・・)

姫坂は暇による睡魔で机に顔を伏せた。そして眠りに就いた。

\*

姫坂が目覚めると辺りは真っ暗だった。時計を見ると夜の8時。しかし生徒会室の机には相変わらず会長を含め他のメンバーの鞆が不気味に佇んでいる。周りは驚くほど静かだ。

「何かおかしい・・・」姫坂は呟いた。姫坂の肘が当たり、鞆が倒れた。姫坂は埃だらけの床に転がった鞆をつかみながら呟いた。「探すか・・・。何かおかしいことが起きているみたいだ」姫坂は鞆をゆつくりと持ち上げ、机に置くと、部屋を後にした。

右と左の廊下は両方とも不気味な闇と窓から注ぎ込む月光によって縞模様のようになっていた。左廊下の一番奥は深い闇のようになっ  
ていて飲み込まれそうな雰囲気を感じさせる。姫坂はその闇に生徒  
会室にあつた懐中電灯を照らした。何もなただの壁がたたずんで  
いる。

「怖い・・・いや怖いと思うから怖く思うんだ。お化けなんかいない」  
姫坂は一人で呟き、そして歌い始めた。

「怖くないっつ　こっこっこっ　怖くないっつ　怖くなんかなっ　いも  
んもんもん」唄声だけが廊下に響く。

姫坂が歌い終わつた瞬間、ドンツ！という音が響いた。姫坂が鳴ら  
した音ではない。その音の発信源は右廊下のずつと奥だった。雪音  
は唾をのみ懐中電灯を持ったまま右の廊下へと進んだ。音は次第に  
大きくなっていく。

姫坂は4つほど教室を越し、音が一番大きく聞こえる奥の部屋。美  
術室へとついた。音は相変わらず響いている。

姫坂は深呼吸をすると、扉を開けた。  
美術室には何も無い。いつの間にか音はやみ、彫刻が月光で不気味  
に影を帯びて佇んでいる。

「何にもない・・・そんなはず・・・」姫坂は呟き、後ろを振り  
返り戻ろうとしたその時、自らの背後に気配を感じ振り返った。

・ゴンツ・

美術室に鈍い音が響き、姫坂の身体は床に倒れた。

\*

「きね・・・ゆきね・・・雪音っ!」

姫坂は何者かに揺さぶられ、かけられた声によってゆっくりと目を開いた。目の前には縄に縛られた会計の郷浦咲子（ごうらさきこ）となんとか縄を外そうとしている品川誠（しながわまこと）が、その後ろに書記の山本康介（やまもとこうすけ）と泣きそうな顔の久保美咲（くぼみさき）がいる。姫坂は生徒会全員の所在を確認すると、ゆっくりと立ち上がった。殴られたからか頭が痛い。

「なんか生徒会の活動中に皆寝ちゃって・・・気付いたらこの部屋にいたの・・・雪音はそうじゃないみたいね・・・。そのこぶ、殴られたの？」郷浦は頭を押さえる姫坂を心配しながら自分たちがここに連れてこられた経緯を話した。姫坂はどうやらそのようだ、と呟いて自分の手元を見た。

- 縛られている -

姫坂は周りを見渡した、見たことのない部屋だ。学校にこのような教室は無い、と姫坂は呟く。郷浦も確かに、と返事をする品川が縛られた手で地面を叩き、「誰がこんなことを！」と憤った。

「あわてるな。この状況を打破する方法を考えるんだ」  
そういったのは生徒会長の山内秀（やまうちひさひら）だ。だが山内はどこか落ち着きがなく、そわそわしている。本人も恐怖を感じているのだろう。

「この状況を脱出する何かを考えなくてはならないな。みんな、とりあえず空いてるドアが無いか調べてくれ」姫坂が冷静に言った。他のメンバーもその考えに賛成し、よろめきながら立ち上がった。

カラカラカラ

生徒会のメンバー達がいままさに脱出方法を探そうとした時に部屋の左奥の扉が音を立てながらゆっくりと開いた。6人に緊張が走る。「やっと気がついたか生徒会イ」男の声と共に誰かが扉をくぐって部屋へと入ってきた。

「山部先生・・・どうしてこんなこと」郷浦が不気味な笑みを浮かべる教師に震える声で言った。

「あることの為に集めたんだよ。ある作戦の為に」山部はゆっくりと生徒会まで近づくと、その姿を見て、姫坂は生徒会のメンバーの一番前に飛び出した。

「なんだ教師よ。作戦？私たちに何かするつもりか？レイプなんかしてみる、肉片ひとつ遣さず殺すぞ」姫坂が獲物を狙う肉食獣のような目で山部を威嚇した。しかし山部はまったくひるまずに、不気味な笑みを浮かべたまま雪音の前で立ち止まった。

「違う。俺が用あるのはお前だ・・・、姫坂ア」山部は雪音の胸倉をつかみ上げた。郷浦が「雪音！」と叫ぶ。山部はポケットから真っ赤な石を取り出し、雪音に見せると質問をした。

「これ？何だと思う？普通の石じゃないんだがな」

「知らない！ なんかの宝石か？」姫坂が必死に脱出を試みるが、縛られた手では、山部の手から脱出することが出来ない。

「魔石だよ」山部がその石の正体を告げると、姫坂は驚愕し、抵抗する手を止めた。

「嘘でしょ・・・魔石って・・・」

「残念ながら嘘じゃねえんだ、これはお前がつぶしたSの社員だった外崎さんから配布された魔石。なんで外崎さんが魔石を持つてるかは言わねえけどな」山部は姫坂をつかむ手を緩めた。姫坂は床に転がった。郷浦達が駆け寄り、姫坂をかばうように前に出る。

「雪音エ・・・俺の作戦っーのは、外崎さんから頼まれたんだ。お前を殺せつてな」

「なら！」床に倒れている雪音が山部を睨みながら言う。「生徒会メンバーは関係ない！逃がせ！」

「ああ・・・生徒会メンバーが何故集まってるかって？」山部が魔石を光らせて言う。

「こいつら全員殺して、お前に最高の絶望を合せてもらいながら死んでもらうためだよ」魔石が光ると、教室の影が盛り上がり、黒いオオカミのように変わる。久保が「ひっ！」と声を漏らしておびえる。

「殺れ」山部が小さく呟いた。黒いオオカミはその声を聞き、郷浦に飛びかかった。姫坂がなんとかオオカミを追い払おうとするが、オオカミは郷浦にのしかかり、抵抗する郷浦の首にかみついた。



郷浦はしばらく抵抗していたが、動かなくなる。姫坂が憤慨し、オカミに飛びかかるが、オカミはいとも簡単にかわし、山内に飛びかかると、一瞬でのどにかみつぎ、黙らせた。

泣いている久保にもオカミは飛びかかり、その牙で息の根を止める。品川と山本は2人で力を合わせオカミを攻撃し、影に戻すが、魔石の力で山部が作り上げた闇の刃により、貫かれて周りを血の海にしながらかなくなつた。

「うわあああああつ！」姫坂が涙を流しながら憤慨し、地面をたたいた。山部が高笑いし、雪音を見下した。

「さあ、最高の絶望を合わせたところで死んでもらうか」山部が闇で作り上げた刃を雪音に向けた。雪音は刃を蹴り飛ばし抵抗するが、刃は消しても消してもその姿を作り上げ、姫坂の頭に向けられた。

「じゃあな、世界を救つた英雄さんよ」山部が刃を振り下ろした。

刃が今まさに姫坂を切り裂こうとした瞬間に、教室の窓から何者かが飛び込むように入ってきた。教室に入ってきた何者かは山部を蹴り飛ばし、地面に足をついた。

山部が壁に叩きつけられると、周りにあつた生徒会メンバーの死体は消え、何もない教室だけが広がった。

「大丈夫でしたか？」入ってきた何者かが姫坂の手の縄をちぎり、声をかけた。姫坂はその声に聞きおぼえがあつた。

「あ……アルス!？」

### 第3 Stage Lost memory

「ア・・・アルス？」 姫坂は突然現れた存在しないはずの青年に驚きが隠せなかった。目を丸くして目の前の青年を見つめ、混乱すらしていた。彼女の頭の中は真っ白だった。

青年の顔は窓から注ぎ込む月光に照らされ、次第に明らかになっていった。

「やっぱりアルスだ！」 青年の顔が完全に見えたとき、姫坂は笑顔でいった。

「でも君は死んでいたはず・・・。どうやって生き返ったんだ？」

姫坂の言葉に対し、青年は無言である。青年の視線の先にあるのは姫坂ではなく山部であり、姫坂という友との再開を喜んでいるようではなかった。

「おい！？なんで無視する？ アルスっ！」

姫坂は青年の胸倉を背伸びびして掴んだ。

青年はいきなり胸倉を掴まれたのでひどく驚き、目を白黒させながら姫坂を見た。

「すみません・・・あなたは誰ですか？アルスって言うのは私の名前なのですか？」

青年の言葉に姫坂は思わず手を離れた。

「アルス・・・何言ってるんだ・・・。冗談でも怒るぞ！」 姫坂は声を震わせて言った。しかし青年の目には嘘をついているような戸惑いはなく、真っすぐな目だった。

「何ごちゃごちゃとやってるんだ？」 姫坂がもう一度アルスに掴みかかるうと、したときに先程攻撃を受け、飛ばされた山部が瓦礫を退けて立ち上がった。

「危ないから下がってて」 青年は自分の前にいる姫坂を手で押しつけた。

「ねえ！ アルス！」 姫坂は目に涙を浮かべて叫んだ。アルスが姫

坂の言葉に振り返る。

「すいません」アルスはそれだけ言った。そして手で空中を叩くような動作をした。

「影剣<sup>シャドウ</sup>」青年はそう呟きながら闇をまるで物体のように引き延ばし、真つ黒な剣を作り出した。

「命まではとりません。安心してください」青年は冷たい表情でいった。

「ほざけ！ クソガキが！」山部は青年まで素早く移動し、ナイフを振るった。しかし、青年はいとも簡単にかわし、影で出来た剣で山部を突き刺した。

山部は悲鳴をあげて、ナイフを落とした。

「終わりです。弱い人だ」青年は影の剣を落とした。地面に触れた剣は床の間に溶け、消えた。

「クソガキがああ・・・」山部は魔石を光らせた。

「無駄だつていつてる。俺はお前を殺したくない。早く降参して帰れ」青年はため息をついた。

「絶対殺す！ころす！コロス！」

「あらら。負の意識が強すぎて魔石に飲まれたか」

青年は歯が尖り、悪魔のような山部の前で拳を振りかざし、素早く振り下ろした。

だが、彼の拳は山部の手に吸い込まれるようにおさまり、今度は山部が拳を構えた。

「や」青年は言葉を全て発する前に顔に拳を受け、窓を突き破り、外に飛んでいった。そして木にぶつかり、地面に落ちた。

「アルス！！」姫坂は窓の外を見た。

「よそ見するな」窓に手をかけている姫坂の後ろで山部が黒く輝く爪を振りかざした。

ガシユツという肉が裂ける音と共に窓辺は血に染まった。

山部の狂気に満ちた叫び声が夜の町に響いた。

窓辺は血に染まり、姫坂は血に染まった。

しかし倒れたのは山部の方であった。山部の頭を窓の外から伸びた影の刃が貫通している。

攻撃をしたのはもちろん青年だった。青年は木の枝に止まり、手から影の刃を伸ばしていた。

「が……があああぁっ！！山部の悲鳴ともいえる悍ましい雄叫びが響いた。学校の周りの家の窓が次々と開き、野次馬が学校を覗く。」

「マズい！ 誰かに見られたら通報レベルだ！」

姫坂は慌て、青年に早く教室に隠れるように指示した。

しかし青年は戻らず、姫坂に手を振った。

姫坂は青年の手を見ると共なって、意識が遠退くのがわかった。ダメージを受けたわけでもなかったが、不思議と眠りの世界に誘われていく。

「あ……アルス……行く……な……」姫坂は遠退く意識の中で必死に呼び掛けた。

だが姫坂は睡魔に負け、目を閉じた。

\*

「ね……ゆきねーっ！」姫坂が声に反応し、ゆっくりと目を開けると、目の前にはどこかで見たことのあるクマの人形。

「あ、気がついた。あんたなんで一日生徒会室で過ごしてんの？」

無断欠席になっちゃったよ」

姫坂を起こしたのは生徒会の会計、郷浦だった？周りは何も変化のない生徒会室。

「さきちゃんか……。そうか……夢か……」姫坂は頭を起こした。少し頭痛がする。

「アルス？ 誰？ 夢の中で誰か会ったの？」

「昔の友人だ。死んだがな」姫坂は自分の服を見た。服は血ではなく、昼食の時にこぼしたスパゲティのソースがついている。

「音楽室・・・音楽室で何か異変は？」姫坂は少しの希望をかけて、郷浦に聞いた。

「何にも無いよ」郷浦はにこやかに笑った。

「・・・やっぱり夢か」分かっている結果であったが姫坂はショックだった。

「帰る。ちよつと用事がある」姫坂は鞆を持ち、歩きだした。ギシギシと床が軋み、少し沈む。

「あーい。会長にいつとくね」郷浦は手を振った。

姫坂は郷浦の行動に、またわけのわからない睡魔に襲われるんじゃないかと不安になった。

#### 姫坂の用事

それは普段はその男の命日にしか訪れない場所。

アルスの墓であった。姫坂はアルスの墓参りに出かけたのであった。

\*

アルスの墓の前で姫坂は足を止めた。右手には花を持ち、左手にはキーホルダーを持っている。

「アルス・・・。夢だったけど、少しでも話ができてよかったよ。

例えば君が私の事を忘れても私は君を忘れないからな」姫坂は古くなつた花を変えた。古いと言っても少し緑が残っている。姫坂は少し前にノアが来たんだな、と推測した。

「これもやるよ。昔、君と初めて会った時君のポケットに入ってたキーホルダーだ。多分大切なんだろう？」

姫坂がキーホルダーを墓の前に置こうとしたときに、姫坂の後ろで砂利を踏む音が聞こえた。

「どうしたの？ 雪音さん」

突然名前を呼ばれ振り返ると、姫坂の後ろにいたのは、かつて戦った仲間。

ノアだった。

「奇遇ですね。僕も花を添えに来たんですよ」ノアの手には新しい花が握られている。

「でも雪音さんが添えてるならいいかな……。僕はその古くなつた花を持って帰りますよ。枯れてますけど綺麗な花だったんでしょうね」

「ああ」姫坂は答えた。

「綺麗な花だったよ。こいつの墓には似合わないほどに」

姫坂がノアに背を向け、花を手向けてた時、ノアは拳銃を姫坂に向けていた。

「甘いな！」姫坂は呟くと同時に花を投げた。花弁が散り、ノアは後ろへ後退した。

「ノアじゃないことは分かっている。この枯れた花、ノアが添えたものだ。君の発言とは食い違いがある」姫坂はポケットから粉と液体が入ったカプセルを取り出し、ひねった。

カプセルは細長いサーベルに変わった。昼間の墓場に沈黙が走る。

「こりゃあ思ってもみなかったところでミスしちゃいました。そうです、私はノアではありません」ノアは黒い煙と共に赤い髪に白いスーツの男に変わった。

「私は魔族って言えばわかるかな？ 君のよく知ってるその墓の中で眠ってるウエルギウス。もといアルスと同じ種族。その中の大魔王側近部第3番隊の隊長のマルバーです。以後お見知りおきを」マルバーは頭を下げた。

「礼儀正しい悪魔だ。だがそのキザな態度が気に入らないな」姫坂はレイピアをマルバーに向けた。

「礼儀正しいのが私のポリシーですから」マルバーは微笑を浮かべた。しかし姫坂はその微笑に、とてつもない邪気を感じた。

「何の用だ」姫坂は警戒心を強め、いつ相手が攻撃してきても反撃

できるように構えた。マルバーはそんなに怖がらなくても大丈夫ですよ、とまたもや微笑を浮かべる。

「最近悪魔が人間を助けてるって言う噂を聞きましたね。もしかしたらデアリアルスが生きてるんじゃないかって思いまして来てみましたが、先ほどの対応を見て分かりました。その可能性は無いみたいですね」

「私も今確認した所だ。残念だったな」姫坂は周りに人が居ないか確認し、安心した。

もし戦闘なんかになり、周りの人間を傷つけてしまえば、色々と面倒だからだ。

「まあ、今日の所は確認だけです。それでは」マルバーは拳銃を下ろし、姫坂に背を向けた。姫坂はマルバーが自分に背を向け、立ち去るまでじっとマルバーを睨んでいた。

完全にマルバーの姿が見えなくなると、姫坂はレイピアを元の粉と液体に戻し、地面に捨てた。

そしてもう一度墓に視線を戻した。

が

「悪魔の言う言葉に惑わされちゃだめですよ」

「えっ!？」姫坂はマルバーの声に、急いで振り返った。

振り返った姫坂の前にあったのは銃口だった。

ドン

銃声が響き、アルスの墓石に血が飛び散る。姫坂は銃弾を浴び、吐血し、墓にもたれながらゆっくりと倒れた。

姫坂が倒れると同時にマルバーは銃を指で回転させて、そのまま血にまみれたスーツのポケットにしまい込んだ。

「さすがに手ぶらじゃ帰れないでしょう」

マルバーは口元を緩めて、墓にもたれて首を垂らしている姫坂を見つめていた。

墓場に風が吹き、木々がざわざわとざわめいた。

## 第4 Stage 天使と悪魔と人

「これで、大魔王様がお考えの戦争で、かなりの障害になる人間が消せた……。大魔王様も喜んでくれますかね？」マルバーは微笑を浮かべ、姫坂に背を向けた。

そして手で闇を作り出し、その闇に消えていった。

数分してから墓参りに来た人間達が姫坂を見て、顔色を変えた。

「誰かーっ！！救急車を呼べーっ！！」

\*

「そんな。雪音さんが……。！」息を荒くしながら報告を受けた少年、ノアが病室に転がり込んだ。

ノアの前には多くのチューブや機械を身につけ、目を閉じて、ベッドに横たわる姫坂の姿だった。

「雪音さん！！雪音さんは大丈夫なんですか！？」

ノアは姫坂に駆け寄り、医者に声をかけた。

「現在、一命は取り留めましたが、かなり危険な状態です。最悪の結果もあると思っただけです。……」

医者は下唇を噛みながら言った。そして続けた。

「やはりこれほど有名な彼女ですし、嫉みから狙われたか、Sの残党が襲った可能性も……」

「クソッ！」ノアは病室の壁を叩いた。

「こんな時にアルスさんが居れば……」ノアは俯いた。

「クシュ」病院から遠く離れた廃ビルで一人の青年がくしゃみをした。

「風邪か……」青年は鼻を吸り、息を漏らした。

（あーあ、ようやく1年頑張って戻ってきたのに風邪かよ……）青年はそんなことを考えながら廃ビルの階段を一段一段上がる。



青年は後一段で階段が終わる所で足を止めた。そして顎に手を当  
た。

「病院行くか」青年は階段を一段飛ばした。

ビルの屋上は地上からは200mあり、ときおり突風が吹き付ける。  
しかし青年は突風にも怯むことなく、避雷針に飛び乗った。

「あれ？風邪って何科だ」避雷針の上に立つ青年の服は突風によっ  
て、大きくなびく。青年はしばらく街を眺め、ため息をついた。

「あの病院か？あの部屋には誰かがいた・・・が、ということだ  
あれは？あの女の子死にかけじゃないか。なんか隣で子供が泣いて  
るし」

「まあ、行ってみるだけ行ってみるか。風邪なら移したくないし」  
青年は頭をだるそうに掻きむしり、避雷針から足を離れた。

青年の体がゆっくりと地面に吸い寄せられる。

青年は地面から50m程の地点で壁を蹴り、地面に足を付けた。周  
りの人間が驚いて目を白黒させているが、青年は気にはしない。  
周りの異様な目線の中で、青年は病院に向かって歩きだした。

\*

青年が病院の扉を開けると、そこにはノアは居なかった。機械が外  
され、眠っている雪音の姿。

「オイ。傷、治してやるから起きろ」青年は眠りに就いている姫坂  
の顔をペチペチ叩いた。医者も誰も居ないので止める人間は居ない。  
青年が姫坂の頭に手を置き、息を吐くと、姫坂のまぶたが微かに動  
いた。

「あう・・・あ・・・る・・・す・・・？」

「あー、先日のお墓：学校のお方、私、アルスでいいですよ。アル  
スだよ。アルスだから起きてください！」青年は自らをアルスと認  
め、姫坂に声かけた。

「アルスっ！」姫坂はアルスに抱き着いた。アルスは邪魔くさそう

な顔をしながら姫坂を抱きしめた。

「よかった！夢じゃなかったんだな！」

「あ、ああ昨日ですか。昨日は周りのヤジウマを寝かせようとしたら君まで寝かせてしまいました。すみません」

「そんなことはいいんだ！本当によかった・・・」姫坂は涙まで流した。アルスは若干惑いを隠せず、姫坂から顔をそらした。

「あ、すまない。思わず抱きしめてしまった」姫坂は顔を赤めて腕を離れた。その後、コホンと咳込んだ。

「で、どうやって生き返ったのだ？」姫坂はベッドから足を投げ出し、ベッドに腰掛ける形で落ち着いた。

「あー？さっぱり覚えてないです」

「ふむ。記憶喪失か」姫坂の記憶喪失か、と言う声と重なって医者が病室に入ってきた。医者は元気になった姫坂を見て、血色を変えた。

「オイ貴様！何してる！なんでその女が生きているんだ！機械を外したからもう死ぬはずだったんだぞ！」

「死ぬはずだったんだぞ？ なんだ、殺そうとしたんですか？」アルスが医者を睨む。病室に異様な空気が流れた。

「てめえ、まさか2年前、外崎さんを追い詰めたアルスか？ 生きていたとは・・・」

「外崎？まさかお前もSの・・・？」姫坂はベッドから降り、構えた。しかし姫坂の言葉には医者は答えず。部屋から飛び出した。

「なんかやばい感じがする！アルスついて来い！」姫坂は先導をきった。アルスも素直にその後を追った。

医者の後を追いかけて、たどりついたのは病院の地下にある鋼鉄の扉だった。扉には医者が中から鍵をかけたらしく、開かない。

「強行突破だ。アルス、破れ」

姫坂の指示におあいごようです、とアルスは答えた。

アルスは足を踏ん張り、力を込めた拳で扉を殴った。扉は発泡スチロールのように砕け、部屋の中が明らかになる。

部屋の中には地下へ繋がる階段が、あり、先は闇に包まれている。

「この先か・・・」姫坂は小さく呟き、階段を下りはじめた。アルスは小さく舌打ちをして、姫坂の後に続いた。

階段が終わると、次に現れたのは長い廊下。先は相変わらず闇に包まれている。

時折、雑談を交わしながら二人は廊下を進んだ。

廊下が終わると、先にあつたのはどこかで見たことのある風景。

Sの社長室。つまりアクラハイルとアルス達が初めて対面した場所である。

二人が部屋に足を踏み入れると、聞いたことのある声が二人の耳に入った。

「ようこそ。アルス、雪音。私だ、外崎だ」

外崎は椅子から腰を上げ、二人に歩み寄った。姫坂は拳を構えるが、アルスは手をポケットに入れ、黙って部屋を見渡している。

「外崎。お前、随分と優しくなったじゃないか。2年前に私たちの前に居た血走り外崎とは違うな」

姫坂の言葉に、外崎はクスリと笑った。

「そりゃあ今でもあなたたちを許していませんし、今からでも殺してやりたいですよ」

「ですが」外崎は首を振った。

殺してやりたい、という言葉に、警戒心剥き出しになっていた姫坂はですが、という打ち消しに手を下げた。

「今はどうしてもあなたの力が必要なんですよ。死体でも生身の体でも良いんです」

「どういうことだ」姫坂は武器こそは下ろしたが、警戒心は消さずに睨み続ける。

姫坂は水槽の魚に見とれているアルスを軽く突いた。

「今、この世界に大きな嵐が迫っている。その嵐は世界を大きな危機に晒すと新約神書に書いてあるんですよ」

「神書？ 聖書じゃないのか？」

「神書はアクラハイル様が悪魔から手に入れた代物で、この世界にはないそうです。私達はこの神書の最後のページが気になったんですよ」

「最後のページ？」

「最後のページにはこう書いてあります。“天ヨリ降りタル二ツノ者、地上ニ巢クウ者ト、交ワリ、風ヲ起コス。風ハヤガテ、全テヲ飲ミ込ム”」

「天ヨリ降りたる二つの者？」

「おそらく天使、そして悪魔でしょう。要約すると、天使と悪魔がこの世界に降り立つと、人間との争いが起き、その争いは全てを飲み込む」

外崎の“争い”と言う言葉に姫坂は聞き覚えがあった。銃で撃たれ、意識をなくしながら聞いた言葉。マルバーが言った言葉。

「これで、大魔王様がお考えの戦争で、かなりの障害になる人間が消せた……。大魔王様も喜んでくれますかね？」

外崎は両手を広げて「その争い。誰よりも役に立つのはあなたなんですよ。雪音」

「私が……か」

「勿論です。私たちSを滅ぼし、世界の英雄になったあなたが、誰よりも役に立ち、期待される」

「そして」外崎は続けた。

「問題はアルス。あなたです」外崎はアルスを指差した。アルスは大きく欠伸をし、目に涙を浮かべた。

「あなたはどちら側なのですか。悪魔側なのか、人間側なのか」

「私ですか？どうでしょう」アルスはさらりと答えた。

「さあな、っってお前……」

「俺は自分が何かすら知らないのです。まあ悪魔だと思っんですけどね」アルスは手の平に黒い焔を浮かべた。黒い焔は不気味にゆらゆら揺れる。

「なら、彼はここで始末したほうがいいでしょう」外崎はポケット

から拳銃を取り出し、アルスに向けた。

「おい！なんのつもりだ外崎！」姫坂は叫んだ。

「なんのつもり？ いずれ敵となり厄介になる敵を始末するだけだ」  
外崎はそう言っつて、引き金を引いた。銃弾はアルスの頬をかすめ、  
壁に当たった。

「……姫坂。俺をはめたのですか」アルスがつぶやいた。

「違う！私は」姫坂が弁解しようとしてアルスに顔を向けた。その姫坂  
の顔にアルスの拳が降りかかる。

姫坂はアルスの拳をかわし、武器。リバイスをとった。悲しみを浮  
かべながら。

「いいぜ。殺せるもんならやってみてください。そのかわり、俺も  
抵抗はします」そう言ったアルスの眼は紅くなり、アルスの足元を  
黒い焰が包む。

「嫌だ！私はアルスと闘いたくない！殺したくない」姫坂は涙まで  
流した。しかし外崎は攻撃を止めず、アルスも拳に力を入れる。

「さあ、全力で殺してあげますよ。姫坂もクソみたいな男も」

アルスはそう言っつて、地面を強く踏んだ。その2秒後に外崎の足元  
から黒い焰が伸び、外崎の体を包んだ。

「死炎」アルスが拳を握りしめると同時に外崎は黒い焰に飲み込ま  
れた。もがく外崎にアルスは手の平を向ける。

「止める！アルス！」姫坂が叫んだ。アルスは姫坂を睨む。

「うるさいですね」アルスは姫坂に体を向けた。姫坂はアルスに恐  
怖を感じ、怯んだ。

ゆっくりと歩み寄るアルスに、姫坂はリバイスによって作り出した  
槍を向けた。

「さあて何分持つでしょうね？」アルスが微笑を浮かべた。

## 第5 Stage 二人の青年

「あの男はもう終わりです。次は貴方です」アルスは眼を紅く輝かせ、姫坂に近寄る。姫坂は体を小刻みに震わせながらリバイスで作り上げた刀を持ち、構えた。

「嫌だ！私は君とは闘いたくない！」

「嫌でも闘うことになるんですよ」アルスは手の平で漆黒の弾を作り上げ、握りしめた。

ボウツ、という音を立て、拳から黒煙が立ち上った。

「さあ。人間様の力を見せてみてください！英雄なんだから少しはやれますよねエ！」アルスは大きく振りかぶり、姫坂に一気に詰め寄った。

そして振りかぶった手を振り下ろし、姫坂の顔に向けた。

姫坂は瞬時に後ろに下がった。アルスは舌打ちをし、さらに詰め寄る。

「そうか、殺さなきゃいいんだ！」姫坂は叫んだ。

「その前に貴方が死にますよ。私に殺されて……」アルスは地面をおもいつきり踏んだ。姫坂は外崎がやられた攻撃と同じと推測し、アルスに詰めより、刀を振るう。

刀はアルスの右肩を切り裂いた。赤黒い血が舞う。

しかしアルスは不気味に笑い、姫坂の腹に手をつけた。

鈍い音が部屋に響き渡り、姫坂は後ろに吹き飛ばされた。激痛が姫坂の腹部に走る。姫坂は腹を押さえながらふらふらと立ち上がり、アルスを睨んだ。

「よく立てますね。今の攻撃で肋骨を折ったと思うんですけども」アルスは半分呆れるようにいった。

「こんなのは何回か体験してる。私はもう慣れた」姫坂は口から垂れる血を指で拭いた。そして少し口元を緩め、ポケットからラムネ菓子をとり出した。

「何をしてるのですか？今はおやつタイムじゃないですよ」アルスは落ちた刀を拾い上げ、姫坂に歩み寄った。

「おやつタイムじゃない。反撃タイムだ」姫坂はそう言ってラムネ菓子をかみ砕いた。ガリツという音がした途端に、姫坂の髪は紅く染まり、瞳が紅く輝いた。

「かつ、覚悟してくださいっ！」姫坂は自分の中の3つの人格の一つの陽菜に変わった。アルスは急な変化に後ろに下がった。

「なんですか？ なんのマジックですか？」アルスは眉間にシワを寄せ、陽菜を睨んだ。

陽菜は地面を蹴り、アルスに詰め寄せた。陽菜の動きの速さに戸惑い、防御を忘れたアルスの腹を陽菜の拳が突いた。

アルスは吐血し、壁にたたき付けられた。だが陽菜の攻撃は止まない。

陽菜の拳はアルスの腹や顔に当たる。アルスが反撃する隙も与えないほどの猛攻が続いた。

陽菜の息が切れ、攻撃が止んだと共に、アルスの体は重力の法則にしたがって床に倒れ込んだ。

「やった・・・」陽菜は歓喜の声を口にし、拳を下ろした。

「なかなかいい攻撃でしたね」油断した陽菜の足をアルスが掴んだ。アルスはそのまま陽菜の上に投げ、大きくジャンプした。

「並大抵の攻撃では、私は倒せません。しかし小娘にしては上出来でしょうか」アルスはそう言って足を振り上げた。

「じゃあおやすみなさい。人間の英雄、姫坂さん」アルスの振り下ろした足は陽菜の腹を蹴り飛ばし、陽菜は地面にたたき付けられた。吐血し、床に倒れている陽菜の腹にアルスが膝から落ちた。

「ぐ・・・あ」声をもらし、苦しむ陽菜を中心に床は陥没した。薄れる意識の中、陽菜はアルスの足をポケットから出した銃で打ち抜いた。

「はつきり言います、無駄。諦めて楽になりなさい」アルスは陽菜の首を掴み、握る。

「アルス・・・お願い。思い出して・・・」陽菜は涙を流しながら蚊の鳴くような声で言った。首を締め付ける激痛と苦しさは次第に強くなる。

「アルスっ・・・お願い・・・戻っ・・・て」そう言ったきり、陽菜の体は止まった。

「さ、邪魔者も消したことですし、私は帰りますか」アルスは微笑み、姫坂を離れた。

「帰る？どこに？」アルスの後ろから声が聞こえた。その声はアルスの耳に入るはずのない声。

「なんで俺がもう一人いるんだ？つてかそこに倒れてるの雪音か？」入ってきた男はアルスと全く同じの容姿の青年。姿形も声もすべてがアルスと同じであった。

「参りましたね。本物とは」アルスの額を一筋の汗が流れた。入ってきた青年は何かを思ったような動作を見せ、ため息をついた。

「お前・・・？悪魔族の中でも第1級の上級悪魔だろ。たしか相手に化ける能力がある・・・だったっけな？」入ってきた青年は突然その場から消え、アルスの前に現れた。

「・・・さすが・・・ですね」アルスは青年をにらんだ。そしてアルスの周りを煙が覆い始めアルスは赤い髪の男、マルバーへと変わった。

マルバーの姿を見て、青年は何かを思い出し、マルバーの肩をつかんだ。

「お前、王宮の兵士にいたマルバーか。懐かしいな」青年はにこやかにマルバーに笑いかけた。マルバーは多少警戒しながらも、青年の行動に心を緩めた。

「だけどな」マルバーの肩をつかむ力が強くなった。「俺の大切な人傷つけるのは感心しねーな」

肩を掴まれ、身動きの取れなくなったマルバーの腹にアルスの拳が入り、マルバーは声をもらしながら床に膝をついた。

「あともう一つ」青年が口元を緩めると、青年を中心として室内に



風が吹く。

「アルスは俺一人だ」

青年の目が紅く輝き、青年の周りを風が取り巻いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8572x/>

---

Lostpowers2

2011年10月28日13時07分発行